

「禅の国際化と私の役割」

東京大学印度哲学科研究生 金秀娥

禅というのは、一言でいえば、自分自身を見ることである。すなわち、自分自身を見ることとは、何かといえば、自分のありのままの状態の姿を見ることがある。このような観点から見れば、禅を修行するということは、何か新しいことを求めるではなくて、今まで自分がもついていてわからなかつた貴重なことを発掘する作業であろう。

印度からはじまつた禅の歴史が、中国、韓国、日本、このごろはアメリカとヨーロッパまで広

がることができるのは、禅の普遍性のためではないかと思われる。しかし、現代社会は解決しなければならないいろんな問題をもつてゐる。そのなかで、ひとつはさまざまなる宗教や理念の差に因る葛藤である。またひとつは、科学技術の発展に伴う精神文化の未開発による苦しみであると思われる。それらの問題を解決しようとする方法はいろいろあるが、仏教の立場から見れば、いかなる理念や教理をも越えて、心されあれば可能である禅が唯一の鍵ではなかろう

か。そこで、禅の国際化と私の役割について考えてみたいと思う。

現代社会には、様々な宗教と理念が存在するが、各自の宗教だけが本物であるとして、他の宗教は迷信という。そのため、世界のあちこちに戦争や深刻な民族問題が起きている。

しかし、宗教の究極の目標は、人間が人間らし

く生きることではなかつたか。しかして、人間は自ら自分自身が造つた理念の縛によつて苦しむを受けている。その理由は執着するからである。すなわち、「これは我のものである」とか「こうでなければならない」という執着によるものである。

仏教は、無我の教えであり、我というものはないと説く、つまり、この現象界は、ある条件の中で一つ一つのものが集まつて出来たのであり、一つ一つが離散すれば世界はない。いろいろなものが集まつて出来たのだから、調和し、融合しなければならないのである。

禅の修行は捨てるから始まる。今までこれが我と考えたものも、我のものと考えたものも善いことさえも捨てなければならない。捨てる間に真の自分の姿を発見することが出来る。眞の自分を発見すれば、今までの苦しみと葛藤が、自分の考え方からはじまつたことも分かるし、



全てのことが自他の区別を超えて平等に見えて来るのである。

次に、科学技術の発達に伴う問題であるが、

科学技術の発展と物質文明は、現代人に豊かな生活を保証してくれた。しかし、このために人間が犠牲にされ、苦しみを受けていることも事実ではないか。例えば、人間の造った核が人類の生命を脅かし、産業の発展は公害を伴い、無数の生命を奪つた。物質は、人間が生きるために不可欠な要件であるが、文明を造るのも人間であり、利用するのも人間である。だから人間に利益をもたらすか害をもたらすかは、その利用の仕方次第ではなかろうか。

仏典には「牛が水を飲めば牛乳をつくるが、

毒蛇が水を飲めば毒をつくる」とある。これは同じ物でも利用する方法によつて結果が違うことを示している。

現代社会の問題は、過度な物質文明の発展に

精神文化の発展が伴わないことからはじまつた。そこで物質と精神の調和のとれた発展が必要と思われる。

このことで、仏教には不二思想と中道思想がある。これはいろいろな意味を含んでいるが、根本的に物質と精神の融合と調和を表している。釈尊が成道以前、苦行主義を捨てて、修行主義を選んだのは心と身、すなわち精神と肉体とか別々なものではなく、不可分な関係にあって適度に調和していると考えたからである。だから、禪は健全な身体に伴う高度な精神文化である。そこで、現代社会にあつて、禪文化の開発と普及とが、物質と精神の均衡を保つて正しく発展することに寄与する。

これ等二つの面で、禪の国際化について私の役割を三つに要約してみたいと思う。

第一に、私が日本に留学して如来藏思想について勉強したいと思った理由は、如来藏思想に

通じて人々を禅の世界に接近させたいと思つたからである。今まで大部分の人々は、禅の修行は出家した僧侶と特別な人々だけがすることだと考へている。しかし、禅の立場から見れば、禅について沢山のことを知つていても、実行しなければ自分のものではない。だから、誰でもまず実行すべきなのである。

また、人々が禅の修行は難しいと考える理由はいろいろあるが、最大の理由は仏に成るのが不可能であると考えていることにあると思う。

しかし、如來藏思想は「一切衆性悉有仏性」を示し、衆生の心そのものが、素晴らしい仏の心と同じであることを強調している。

そこで私は、人々に自分の心が仏の心と同じことを確信させて、禅の世界に入らせたいと思つて、如來藏思想を学ぶことを考えた。

二番目は、禅文化の開発である。昔の中国と韓国と日本との文化は、禅文化そのものであつ

たが、今はインスタント食品に代表される便利な技術文明のために、その風潮はほとんど失われてしまつたのではないだろうか。例えば、茶道や書道などを、急速に変わる現代社会に合わないと考へるかもしれないが、動中静の妙味が禅文化の生命であつたのではなかろうか。日本の諺の中に「急がば廻れ」というのがある。忙しい現代社会こそ余白を造る禅文化の開発が必要と思う。

最後に、我々が国際化という言葉を聞く時、すぐアメリカとかヨーロッパを思い起こすことである。勿論、それ等の国に禅を伝えるのも重要だが、私達が忘れてならないのは、第三世界ではないだろうか。今の第三世界の国々は、文明の開発に熱心である。また、キリスト教の普及と民族宗教との葛藤もある。そこで我々は、アメリカ、ヨーロッパ諸国と共に、第三世界にも関心を持たなければならぬと思う。